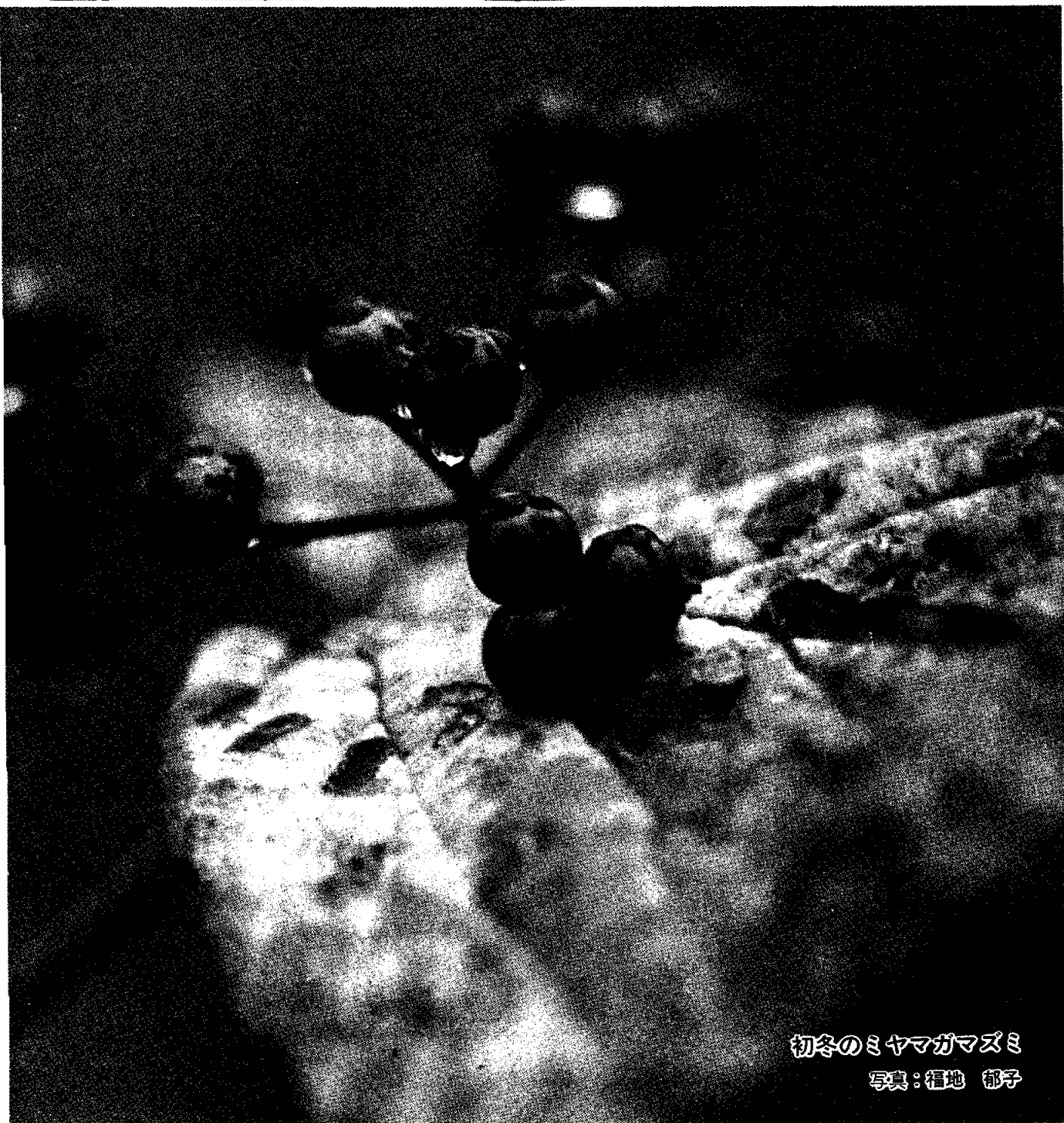
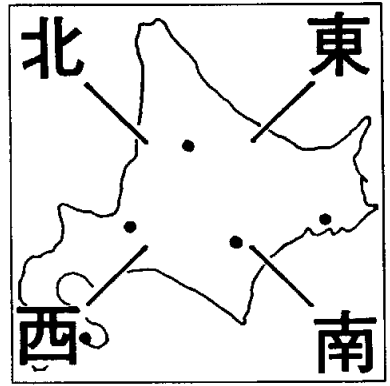


# NCS HOKKAIDO



初冬のミヤマガマズミ

写真：福地 郁子



## 長靴の旅 サツポロ



金上 由紀

八垂別の滝から砥石山にむかう。沢に沿って谷底の道を歩いて行くと、裸木の枝の重なりをすかして谷の地形がよく見える。落葉に埋もれて、山の冬仕度は完了しているようだ。時折風によって雪が落ちてくる。

笹のない斜面を登ってみる。腐葉土の下はガラガラの岩場だ。アクシバやミヤマガズミの枝先に残る透き通るような赤い実。口に入れると酸っぱさもずいぶん淡くなった。ミズナラの実を拾う。クリスマスツリーにつけたい形のよい袴付きだ。枯葉をガサガサいわせて下の道におりる。ここにもそこにもアケボノシュスランの群落。ナニワズは来年の花芽を固くつけて今にも香りだしそう。沢を囲む岩や朽木にはびっしりと苔がついている。その中で揺れているのはカラクサンダ。

登るにつれ沢は幾筋にも枝分れし、次第に細まり、道はつづら折りの急斜面。植物も単調になり一同声もない。ツルリンドウのルビーのような実に歓声をあげ、ようやく息をつく。三時間余。登山目的の一行なら、とうに山頂に着いている頃だが、右へ左へ寄り道しながらの我々は、T4の分岐点までで帰途につく。「来春はあの針葉樹林の林床をみよう」とか「その崖には何かありそうだ」等といいながら下る。真新しいリョウメンシダが、まるで新春の門先のように谷を飾っている。喫茶店でのコーヒータイム。地下鉄の駅で解散。

夕食の買物をしに市場による。「奥さん、何してる人さ？」陽気な八百屋のお兄さんが声をかけてくる。スーパーマネキンさんも「どこへ行ってきたの？」とひやかす。私が男物のゴム長靴をはいているからだ。どんな大雪の朝もハイヒールで出勤する人の多い都会サツポロでは、雪もない晴れた日にこんな長靴姿は目を引くようだ。グランドホテルでお食事してきたのよ」と私はすましていう。

原松次先生は札幌の植物の目録を作るため、市内とその周辺部を丹念に調べておられる。大抵は一人でバイクで行かれるのだが、この三年程、我々数人のグループも時々お供させて戴く。「先生これなあに」とヨモギからエゾイタヤまで何もない発見があるものだから」と先生はいつも優しい。

チョウジソウ、ハマハナヤスリ、ペニバナヤマジャクヤク、セイタカズムシソウ等々美しい花、珍しい植物を、わが町札幌の中でたくさんみせて戴いた。原先生といえは、頭を包む日本手ぬぐいとゴム長靴がトレードマークだ。はじめはスニーカーでお供した我々も、藪を漕ぎ、沢を渡り、湿地や泥炭地を歩き回る内に、いつの間にか全員ゴム長靴スタイルになった。女物は底も薄く弱いので、足の小さい仲間には男の子用をはいている。

福移でサワシロギクやエゾリンドウの花にみとれていると、黒塗りのクラウンから眼鏡の男が降りてきて「この辺りの土地がご入用か」ともみ手で声をかけてきた。この三年の間にも札幌は急速に変化している。が、地形の襲の一つ一つを丁寧に眺めて歩くと、かつての札幌の自然が随所に残っているのが見えてくる。

辺境、秘境への旅もあれば、グルメの旅、豪華な船の旅もある。「横丁をまがればそれはもう旅の始まり」という人もいる。「今年も又スキーツアーの若者が、大挙札幌にやってきた」というニュースを聞きながら、長靴で歩く札幌の旅、当分私はやめられないなと思った。

(札幌市在住)

## 自然破壊の原因 への一考察



吉田兎四郎

自然保護運動の幹部の方、会員の皆様の絶大な努力と成果に常々敬意を持っている会員の一人ですが、何れの協会の論旨を見ても、何だか今一つ迫力に缺けた所があるような気がしてなりません。それは何であろうかと考えているうちに思い当たったのが、幼稚な素人の考えと笑われるかも知れませんが、次の点であります。

何事でも対策を立てるとき、真先に考えられるのが、その原因であると思いません。

では自然破壊の原因は何かと云うと、これが眞剣に論ぜられたことはあまりないのではないかと思えます。

その一番大きな原因は人口の増加ではないでしょうか。そしてこれを大きく加速しているのが、人間の飽くなき文化的向上の精神ではないでしょうか。

この二者であるとすれば、それは人間の繁栄の目標として欠く事の出来ないものでありまして、それとの調和こそ、自然保護の神髄だ、人間社会の進歩なくして何の自然保護だとお叱りを受けるかも知れません。

しかし今、そんな暢気な事を言っていて、上品な運動をしていて大丈夫なのでしょうか。

世界の人口は既に五十億を大きく超えて、地球上で賄いきれる食糧は七十億人分だと云う限界には、今世紀の終りか来世紀の初頭には達しようとしています。

砂漠化の急激な進展、熱帯雨林の猛烈な減少、海洋汚染、酸性雨、温度上昇、海面の上昇、オゾン層の破壊、農業汚染、何れをとっても、大袈裟かも知れませんが、地球生態の危機、人類の絶滅の危機がそんなに遠い所にはない警告と受け取る事も出来ると思えます。

今こそ、いや既に遅いかも知れませんが、自然保護運動の中心は、この原因の除去、減少に向けなければならないと思

います。

これは人間としては、口にはいいけないタブーだと思っている人も多いと思います。しかし人類の少しでも長い生存の為には、避けて通れない所ではないかと敢て一石を投ずる次第です。

これを北海道に限定しても、明治初めには開発促進こそ、そのモットーでしたでしょうし、これはまた昭和になっても続いたと思えます。

そしてその頃は森の木を切り、家を建て、開墾し、自然に溶け込んだ生活をするのは、一つの理想であり奨励されるべき事だったでしょう。此の頃は人間も自然の完全な一部であり、自然の破壊などと考える人はなかったと思えます。今や一転して人間対自然の問題として大きく取り上げねばならぬ時代となりました。

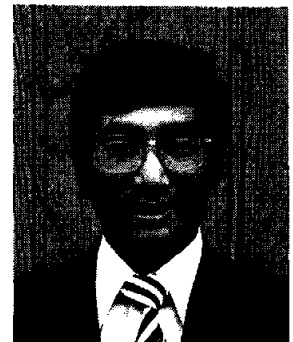
此の意味からも、「北海道の人口増加の抑制」は北海道の自然を守る最大の方法ではないでしょうか。諸賢の御批判を願いたいと存じます。

(横浜市在住)

## 「奥尻の自然保護を考える会」の発足にあたって

制野 征男

一九八九年十一月二十日の臨時総会に



おいて、「奥尻の自然保護を考える会」は、北海道自然保護協会に加入することを決めました。

「奥尻の自然保護を考える会」が発足したのは、一九八九年九月二十日でした。開発建設部、道、奥尻町が公費を投入して進めている国営草地開発事業によって、森林が伐採され、草地に変えられていく無残な姿を見て、奥尻島の緑を守るために、町民の運動で阻止しなければならぬと言って、有志がたちあがったのが発足の理由です。

六月十七日に八木会長が多忙の中来島され、現地視察と講演会を開いていたことも、会発足に大きな励ましになりました。

国営草地開発事業は採草地、放牧地を含めて四二六ヘクタールを草地にする計画です。すでに、一八〇ヘクタールが草地化されていますが、八月、九月の豪雨では、かねて心配されていたように、河川、道路の破損、そして海の汚濁が発生しました。町では原因を豪雨のためとしています。国営草地開発事業による、保水

能力の低下にあるのは明確なことです。海岸に堆積している土砂が、いまでも少しの波で海面にあらわれ、海がにごってしまい、磯まわりの漁民は不安をかくしません。奥尻島の西海岸では、海岸線が変わってしまうほど、土砂が流失したと漁民は証言しています。西海岸はアワビ、ウニなど、奥尻島でもっとも資源の豊富な場所でもあり、漁民にとっては死活問題となっています。

道企画振興部の調査報告でも、国営草地開発事業による、奥尻の農家の発展は極めて困難だと指摘されており、事業推進の理由はないのです。

奥尻島で、河川と海の汚濁が発生する理由は他にもあります。それは国有林内のブナの伐採です。

北海道自然保護協会の調査でも明らかのように、奥尻島には森林の八〇%を占める、極めて良好な原生のブナ林が植生しています。そのブナが、過去五年間で八千立方メートルも伐採され、その跡地に植樹していないため、荒廃されたままになっているのです。営林署では、さらに今後、五年間で四五〇〇立方メートルのブナを伐採する計画をたてるとともに、ブナ林の伐採跡地に林道の建設を進めており、すでに一六〇〇メートル建設しています。

奥尻の自然破壊はこれだけではありません。まさに狂気のさたと思われる、奥尻島中央部の山岳地帯を縦断する、広域農道の建設計画がもちあがっているので

す。当該地帯に植生する原生のブナ林は、奥尻島でもっとも良好なブナ林なので

。「奥尻の自然保護を考える会」の、奥尻の自然を守るための課題は山積していますが、当面「国営草地開発事業」の中止と、藻内林道の建設中止、島内でのブナ林伐採禁止を関係機関に要請していくことを、臨時総会で決定しました。具体的な運動の方針として、開発建設部、営林署に対してハガキの要請運動、奥尻島内すべての団体との共催による「奥尻の自然保護についてかたる集い」の開催、島内外の関係団体に対する協力要請などを進めていくことにしています。

「奥尻の自然保護を考える会」の運動を知った漁民のKさんは、「わしらは何もできないけれど、海を守るためにこの金を使ってくれ」と言って、苦しい生活の中から、二万円のカンパを私に届けてくれました。東京の島人会の会長からは五万円のカンパがおくられてきました。カンパをうけとる私の胸にこみあげてくるものがありました。

「豊かな緑・澄んだ海」これが奥尻の宝なのです。この宝を守るために、北海道自然保護協会の力をお借りしながら、私たち「奥尻の自然保護を考える会」は力一杯頑張りたいと思います。

(奥尻町在住)

# 自然保護の講演を開催して

幌村 司

たと思います。  
(三石町在住 幌村建設・専務)

日高支庁管内の建設業の若手の担い手により、「プログレス日高」という団体が正式に結成されたのは一九八九年の四月でした。設立総会の席において様々な議題が示された中に、異業種間の交流という提案が示されました。同業種の中だけの交流、交流に限られ、多方面との交流が欠けているのでは、視野の狭い偏った意識しか持てないのではないかと、この危惧を抱いての提案です。

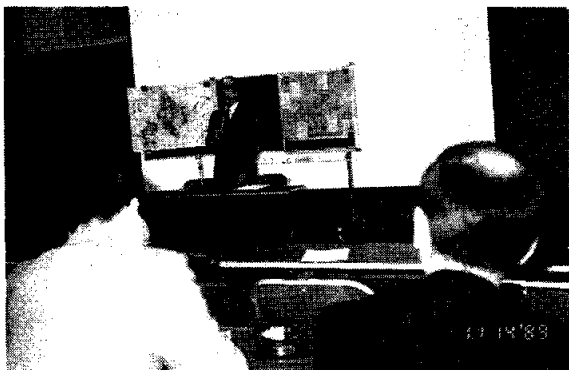
そして交流のための委員会が作られたのです。この委員会ではどんな団体と交流を持てば良いのか検討された中で、最近、地球環境の危機が叫ばれる報道（オゾン層の破壊、熱帯雨林の激減など）が多いこと、建設業界と関係の深い道路建設事業において、自然保護上の話題が多いことなどから、自然保護団体との交流が最適ではないかという結論になりました。いよいよ十一月十四日北海道自然保護協会の八木健三会長、紺谷友昭常務理事に、講演という形で浦河に来ていただきました。午後一時半より日高支庁後援で、日高支庁で行われました。プログレス日高会員、支庁の職員、各団体の方、また

一般の方々も幅広い層の人々五〇人が集まりました。八木講師は「北海道の自然と自然保護」の中で、北海道の地質の成り立ちから初めそこに育つ生物の特色など、スライドを使いながら詳しく説明、高まるリゾート開発の波に、大規模に失われる自然に対して「自然あつてのリゾート」と自然との調和を訴えておられました。

紺谷講師は「地球環境の破壊とこれからの開発」の中で、現在進行している地球規模の自然環境の悪化について配布したデータを中心に詳しく述べ、特に地球的規模でのオゾン層の破壊、公共投資による自然破壊などを指摘し、技術先行ではない住民福祉につながる地域発展を呼びかけておられました。

質疑に入ると、「自然と共存する道路工法とは」「他に産業のないところでどうして暮らしているか」「道路が与えた影響は」……といった突っ込んだ質疑が相次ぎ講師もおおわらわ。予定の時間を大幅にのびる盛況でありました。

今回の講演会は我々にとって大きな啓発になったと同時に、難しい宿題となっ



# 森林の危機

## — 森林の保健機能の増進に 関する特別措置法 —

神原 昭子

一九八九年八月、日本消費者連盟の主催で開かれたアジア太平洋消費者会議で、日本の進出企業によって丸裸にされたアジアの熱帯林のフィルムが上映され、「安い木材を求め日本の商社は、わたしたちの国の山や森を根こそぎ伐採しています。それによって失われる莫大な資源と自然環境。追いたてられる森の民。豊かな森林に恵まれた日本のみなさんは、このことをどう思いますか」というマレーシアの参加者の発言に、言葉を失った会場は、重苦しく静まりかえりました。

その「豊かな」日本の森林も、今、崩壊の危機に瀕しています。日本の森林面積二、五〇〇万ヘクタールは、森林率ではフィンランドに次いで世界第二位ですが、国民一人当たりの森林面積は〇・二ヘクタールで、これは世界平均の〇・八ヘクタールの四分の一にすぎません。一見、豊かにみえる日本の森林が、一九八七年のリゾート法成立以後、ゴルフ場やスキー場などのリゾート開発によって急速に失われ、その開発の波は、これまでは手の届かなかった奥地の森林にまで侵入してきています。さらにこの十二月一日には「森林の保健機能の増進に

関する特別措置法（以下「特措法」）が、無秩序な自然破壊の歯止めとなってきた保安林制度を崩壊させるものとして、北海道自然保護協会をはじめとする全国の自然保護団体やゴルフ場問題全国連絡会、日本消費者連盟などが反対する中で成立しました。

この特措法は、八九年の三月末に国会へ提出されたものの、リクルート騒動の中で継続審議となり、今回の臨時国会に再提出され、十一月十五日の衆議院農林水産委員会審議開始、翌十六日、自民・社会・公明・民社の各会派の賛成多数により可決、十七日の本会議を経て二十一日には参議院農林水産委員会審議開始、二十八日に採決、十二月一日の本会議で成立というスピード審議でした。

リゾート法が、二年前の売上税国会ではとんど審議されず、国民に問題点が明らかになされぬまま成立してしまったのと同様に、今回の特措法も、連日の消費税論議のかげにかくれ、新聞やテレビではとんど報道されず、大多数の国民が法律の存在すら知らないうちに成立してしまつたのです。

委員会における審議では、農業汚染が全

国的に問題となっているゴルフ場がこの法律によってつくられるのではないかということに質疑が集中しましたが、林野庁長官は、この法律にもとづく開発面積は「一か所当たりおおよそ五〇ヘクタール」とし「現在建設中、開設中のゴルフ場でこの条件にあたるものはない」と答弁。しかし、この法律の総量規制が開発面積ではなく率で示され、一区画の開発面積を大きくとれば、一八ホール六〇ヘクタール以上」というゴルフ場の建設も可能であるという危険性については、法律制定後、通達や要綱で指導・調整すると表明。

また、林地開発許可制度および保安林の規制緩和による森林の乱開発への危惧に対しては「その施設が森林の保健機能増進のための施設かどうか」を都道府県知事が認定するさいにチェックできるとし、その手続きについては、現行の森林法のように具体的に明示されず、これもまた、法律成立後に制定される通達や省令の内容とその運用にあずけられることになりました。大切な事項が法律に明示されず、行政官僚の許可権へゆだねられてしまつたのです。

大規模な自然破壊をもたらす全国のスキ

ー場やゴルフ場の開発計画の大部分が、水源かん養保安林や土砂流失防備保安林の中に予定されている今日、特措法の成立は、明治三十一年の森林法制定以来およそ九〇年間、日本の森林を守ってきた保安林制度を崩壊させ、それにより全国の森林が今まで以上に開発の危機にさらされることになりました。

山や森は、その地域を潤すだけではなく、日本中の、地球上のすべての生命の源でもあります。私たちは今、この大切な山や森を、リゾート開発による破壊から守るために、リゾート法や特措法の廃案をめざすとともに、各地で計画されているスキー場やゴルフ場などの大規模開発の是非について、それぞれの地域住民の中で検討しなされるべきではありません。一度崩され、伐採された山や森の復元は困難ですし、ゴルフ場に大量に散布される農薬は、水や空気や土を通しての食物・環境汚染として、日々、私たちの体内に蓄積され、健康を蝕んでいくからです。

石炭産業の地盤沈下、農林漁業の後退による過疎化の進行など、北海道のリゾート開発を止めることは困難ですが、山や森を目先のカネや雇用のために壊すのではなく、農林漁業と地場産業を守り育て、自然と調和したまちづくりの中に、地域の特色を生かしたリゾート計画を立てていくことは、夢ではないはず。北海道の大自然を守ることは、日本の、そして地球の生命と環境を守ることもあるからです。

（ゴルフ場問題全国連絡会）

# 「あすの夕張と自然を考えるシンポジウム」よりの報告

当協会理事 前田重和

北海道自然保護協会と「あすの夕張と自然を考えるシンポジウム」実行委員会の主催による「夕張岳シンポジウム」は、十二月二日、三日に夕張市内のファミリースクール「ふれあい」を会場として開催された。

九月より当協会と夕張の「ユウパニコザクラの会」のメンバーを中心とする実行委員会（実行委員長・当協会会長・八木健三、担当理事・前田重和）は、年内に是非、現地夕張でシンポジウムを開こうと話し合い、準備を進めてきた。今回のシンポのテーマとなった、「夕張岳の自然」と「あすの夕張」は今までの自然保護運動の範囲を超えて、今回のシンポの熱い議論を巻き起こす源となった。いま全国で、嵐のように吹き荒れているリゾート開発の多くは、地域の経済の低迷と過疎を理由にしている。本来、自然を大切にすることと、人間の経済活動の成否は、同じテーマのうえで論ぜられる問題ではなかったと思われるが、地球がどんどん狭くなり、その両

者が出会ってしまったのである。

開発しようとしている人達は、このところよく「反対ばかりでなく、自然保護の側からも対策を出すべきだ」という主張を展開している。地域の活性化や、過疎の問題の解決策を出せないのなら自然保護を言う資格はないということらしい。ずいぶん乱暴なテーマのおしつけではあるが「人間が自然か」的な二者択一論に対して、今までの私たちは必ずしも前向きに取り組んでいなかったことも事実である。その理由の一つには、不利益な方向へ向かうことにもなりかねない、という配慮もあったこととは否定できない。開発しようとしている人達は、そこを自然保護派の弱点と見ているのである。さて今回の夕張シンポはまさにそのすべての難問を抱えた夕張市と、世界的な希少価値を持つ高山植物を有する第一級の山、夕張岳の両者の間で議論となったのである。シンポ実行委員会でもこのテーマの取り方には、随分多くの時

間がかかけられ、結論が出ないままに当日の参加者に手渡されたのである。さてこのように重いテーマを含み、しかも絶対に守らねばならない夕張岳の自然であるから、どの位の参加者があるものか全く見込みが立たず、現地本部でも前日までの集計では、せいせい一〇〇〜一五〇名位の参加ではないだろうかということであった。さて当日、受付が十二時から開始されるとともに、続々と参加者がつめかけ開会式までには、一八〇名と大盛況。その後も増えつづけこの日の参加者は、総勢二三〇名、次の日には二五〇名になった。この時点で今回のシンポは成功が確かになった。

そしてシンポの内容は、初日（二日）横路知事、中田夕張市長、夕張出身の有江前北大学長他のメッセージが読み上げられた後に、植物写真家の梅沢俊氏の夕張岳の植物を中心としたスライドを上映。続いて森元繁氏（ユウパニコザクラの協会会長）の基調講演の後、パネリス

ト寺島一男氏（大雪と石符の自然を守る会）、神原昭子さん（日本消費者連盟）、河野博光氏（テレビ北海道）の三者による地域の活性化についての提言がそれぞれ実例をあげて具体的な解説で分かり易く、今回のテーマを話し合うのには非常に適切なものとなった。

会場では参加者が真剣に話に聞き入っていて、ものすごい熱気である。一体なぜあの夕張岳が破壊されなければならぬのか、ととんとその理由を知ろうといった熱気が会場に満ちていた。それは悲しみでも、怒りでもなく、非難でもない冷静な探求心であろう。このことは、このシンポのテーマに各人が全力で向かっていることの証となっていた。途中、発言した地元夕張の市会議員の方の夕張の実情を訴える言葉にも、大きな関心が集まり、次の日の分散会（メインテーマを三班に別れて話し合う）での参考となった。

翌日（三日）は、朝九時より一時間にわたる石城謙吉氏（北大苫小牧演習林長）の講演「自然は誰のものか」で始まった。石城氏は、日本の開発行政とリゾート開発の関連性を、ご自身が詳しく見聞した苫小牧東部工業団地の例を取り上げて分かり易くまとめ、今回のリゾートブームの真の狙いを、行政と資本の流れから解明された。そして、貴重な自然を食い潰す愚

におち入らぬよう、切々と訴えられたのが、全参加者の胸に響いた。この後いよいよ一般討論形式での分散会となり、三班に別れて行われた。各班ごとに、動物、植物、地質の専門家と初日のパネラーの助言のもとで、活発な議論が交わされた。参加者によるとあと二時間位の時間が欲しかったとのこと、かなり充実した内容の分散会になった。この企画は、次回の夕張シンポにも是非引き継いでほしいものである。

昼食をはさんでの四時間にわたる分散会の後、全員が再び一堂に会し各分散会の報告があった。これに続いて地元で粘り強く運動を進めてきた、シンポ事務局長、水尾君尾さんが感動に満ちた声でアピール文を高らかに読まれ、参加者より大きな拍手がおくられた。シンポ実行委員長として、今回の企画の総責任者として八木健三会長は、その挨拶の中で今回のシンポのみのり多かつた内容を総括し、この意義あるシンポジウムを新たなスタートとして夕張の自然を守ることに、夕張の一町おこしをはかる運動に発展させようと結んだ。このあと森元繁氏が閉会の辞を述べられた。

おそらくこのシンポは北海道の自然保護運動の一つの変革を成すものといえよう。長い間苦しめられてきた「人間か自然保護か」の

問いかけに、臆することなく堂々と立ち向かっていく勇氣を持ったのである。その解決には、より多くの人々が互いに知恵を出し合うことが肝要であると実感した。いろいろ問題は山積している

が、「勇氣」と「バイタリティ」この二つが今回夕張岳シンポジウムから参加者全員に贈られたと思う。それはこの四月十七日、苦境の中から生まれてきた「ユウパリコザクラの会」という小さな会からのプレゼントでもある。シンポ開催にあたり、全力投球された地元夕張の方々の努力と熱意に心から感謝を述べたい。またこのシンポに多数の当協会員が参加され、また参加出来なかつた方々からは、たくさんの協力金によるご支援をいただいた。これらのご支援に対し心から厚くお礼を申し上げます。

今回のシンポの詳しい内容については、近々とりまとめ、報告集の形で紹介の予定である。その時は是非ご一読下さるようお願いしたい。



# 私のリゾート

前田 祐子

今から十年前、私たち一家は、札幌の街のど真ん中、それも幹線道路に面した道営住宅の五階に住んでいた。草木が育ち、子供がどろんこになって遊べる地面は遠かった。窓を開ければ、頭の皮がめくられるかと思うような騒音が立ち上ってきた。

一軒家への展望はない。せめて週末だけでもここから脱出する方法はないか。何かを求めながらハイキングを続けていたある日、札幌から一時間半ほどの小さな村の小さな集落に迷い込み、人によっては廃屋と呼ぶであろう空き家を発見したのである。

その家は、山間を流れる川のほとりにあり、さくらんぼやくるみの木に囲まれ、家の前の池にはスイレンが咲き、カワセミが魚をとり飛んできた。その日のうちに隣りに住む大家さんの了解をとりつけ、次の日曜日には、最低限の生活に必要な布団、食器、コンロなどを運び込み、以来われわれは、人もうらやむ「別荘」のオーナーなのである。

た。はつきり言って、家賃は年間四万円である。備品は薪ストーブを買った以外、すべて家にあつたもの、いただきもの、拾いもので間に合わせた。トースターなんか、三個も拾ってしまった。週末や長い休暇に、何十回となく通っているわりに、家の中はきれいにも豊かにもならない。快適な巣づくりをするなんて時間があったりないからである。

ここではやることがいっぱいある。歩いてまわる範囲の中に、沢があり湿地があり山があり林があり砂防ダムがあり、行く度に花や鳥を訪ねて一巡すれば、十年たった今でも新しい発見があり、一日はあつという間に過ぎる。絵を描いたり釣りをしたり、夏なら川で泳いだり、星をみながらお酒を飲んだりすれば一週間の長期休暇も飛ぶようにして終わる。

その上、地元の人に教えてもらった山菜料理を作ったり、笹の葉をとってちまきを作ったり、薪割りをしたり、ゴミを埋めたり焼いたり、ハエを叩いたり、ここなりの生活も結構忙しい。

長くひとつの場所に通ったことで、自

然の流れを感じることができた。ネズミが異常繁殖した年があり、大切なさくらんぼの木が皮をかじられて枯れてしまった。その後の年には明らかにキツネが増えた。ジブシーモスという白いガが二年続けて大量に発生し、辺りを乱舞したが、三年目には、その名の通り、いずこへともなく姿を消した。泊原発の電気を札幌へ送るための鉄塔が建ったときは、鳥の姿が消えたが、最近またポツポツ戻ってきた。

ここで得たこと学んだこと。本当に根っこのはえた豊かさは、きれいな水と豊饒の大地があることで、あとのものはだいたいお飾りやつけ足しだということ。自然を細かにみていると、あきないってこと。楽しい「別荘暮らし」には、夫婦の相性の良さが必須条件だということ……。

さて最近、世の中はリゾートブーム。田中内閣当時の列島改造の波からは目こぼしされていた日本各地の美しい自然が、国策を背景にしたリゾート開発という名の大炮でねらい撃ちにされている感

がある。

「リゾート」という言葉には「何度も訪ねる」という意味があると教わった。だが、大企業が巨額の資金を投入してつくった施設を何度も訪ねるには、われわれなどはお金が続かないし、農薬をまいて管理された美しい芝生に、行く度に新しい発見があるとは思えない。

手前みそのようだが、私たちが「何度も訪ねる」ことになったこの小さな村の暮らしには、好ましいリゾート地をつくるためのヒントが、たくさんあるような気がしてならない。

実はここへ行く途中、たおやかな稜線をみせる余市岳で、大規模なリゾート開発が進められている。知らないわけではなかったが、当初はさして疑問も持たず、そのままするべったり、あれよあれよと見守るばかり。ところが、去年初めて登り、今まで登った山の中で最も感動した夕張岳にもスキー場ができると知るにおよび、「あんまりだ」とついに目覚め、ささやかな活動を始めた。

自然に学び慰められたから、少しは恩返しをしなければ……。『リゾート十年』を経た今の気持である。

(麦工房・主宰)





# さあ、主婦の出番ですよ 「あすの夕張と自然を考えて下さい」

あすの夕張と自然を考えるシンポ実行委員会

事務局長 水尾君尾

## 自然と人

インタビューー

前田重和(当協会理事)

次々と大型リゾート開発計画の大波が北海道の自然の上におしよせてきます。これまで自然保護の声を上げる事もなくごく当り前に夕張岳に親しんできたこの町の人達の頭の上に、ある日突然日本最大のリゾート開発業者「国土計画」のスキー場計画が落ちてきました。今回は、その夕張市で開催された「夕張岳シンポジウム」の事務局長として活躍された水尾君尾さんにお話を伺ってみました。

☆水尾さんが夕張岳の問題に関わるようになったきっかけは、

☆麦工房の前田祐子さんが夕張岳を守るキャンペーン用の絵葉書集、「花の夕張岳」を作り、それに入れる説明用のパンフレットの文章を私に頼んでくれたことが最初です。

☆この問題以前から自然保護運動に関わっていたのですか。

☆いいえ、全然なかったのです。運動ではないが去年の大雪山での講習を受け、大雪山ボランティアアレンジャーになりました。未だ何もしていませんが……。

☆夕張岳には登ったことはありませんか。

☆八年くらい前から毎年子供達と登っています。

☆最初に夕張岳のスキー場計画を知ったときは、どうお感じになりましたか。

☆なんと言えはいいのかわかりませんが、何か行動をしなければ……とは思いますが夕張岳を守るキャンペーンの絵ハガキの取扱者になるだけでも夕張は勇気のいることです。「白い目で見られたら困る」「名前を出されたら困る」と悩みました。絵ハガキの説明を書くだけでもまず、夫と相談したのですよ(笑)。

☆夕張の中で発言することの難しさです

ね。

★まず自分との葛藤です。

☆普通の主婦の立場で、お宅での理解はどうでしたか。

★厳しい質問ですね……。まず最初に「市民としてやりたい」と話し、それから事務局長をお引き受けしました。そして数カ月が過ぎ、今シンポを終えてホッとしています。やはり家族は一番の良き理解者だと感謝しています(笑)。

☆ユウバリコザクラの会が発足するまでのいきさつをお話し下さい。

★初めの頃は、麦工房の前田さんと、写真家の梅沢さんと、電話や手紙で連絡を取り合うだけで、直接お会いしたことがなかったんです。札幌で梅沢さんのスライド会に出て初めてお会いしました。その会のと夕張岳のことを話した時、梅沢さんが「夕張岳が、夕張にあったのはとても不幸なことだね」と言われたのが一番ショックでした。そうしてななかで、夕張山岳会が夕張岳を守ろうと、全国に署名を集めるのをお手伝いしているうちに、夕張岳の自然を守る運動を、息長く強力に行なうために、山岳会の人々を中心に「ユウバリコザクラの会」ができました。私もすぐ入りましたが、私の気持ちの中で梅沢さんに会ったことが、私を動かしたのでしょうか。

☆夕張の中でユウバリコザクラの会の活動は大変でしょう。

★少ない人数、運動の素人の会としては、短期間ですが中身の濃い動きをしてきたと思います。やるべきことはやっているのではないのでしょうか。

☆先日の夕張岳シンポジウムについて簡単に報告して下さい。

★予想を上回るたくさんの方々がおり感謝しています。地元ではシンポ前(十月十七日)に、商工会議所や夕張地区労、農民協議会が連合で開発促進の要望書を夕張市に出していましたから、本当に何人の方が集まるか心配していました。そんな訳で一二〇人位の参加を予想していましたところ、実際には約二五〇人の参加者があり、本当にうれしく思いました。

☆今回のシンポのテーマであった「あすの夕張」についての成果はどうでしたか。

★反省点として、少人数で分散してじっくり話し合うのが難しかった、時間が足りなかったことなどあります。でも今回のシンポでは今迄見えなかったことがよく見えてきましたので、これからの活動には大変役立つことだと思います。またこのシンポで出会ったいろいろな立場の人々との、ネットワークも大きな収穫でした。多くの人と出会って話した感動が、次の運動のエネルギーになるのではないかと思います。

☆最後に、水尾さんにとって理想の夕張像を聞かせて下さい。

★夕張で長く子供劇場をやってきた関係で、子供達に接することが多く、夕張で子供たちが美しい自然と、心優しい大人たちによって育てられてゆく、そんな環境の町になったらいいなあと思います。今の夕張ではどちらも失いつつあるのですから……。

☆どうもありがとうございます。

夕張岳シンポで中心的役割を果たしたのは、三人の子供を持つ普通の主婦、水尾さんでした。今、世界中でこのような新しいタイプの人たちが自然や環境を守るために動き始めています。この新しい波に期待したいと思います。

# 「八甲田山環境アセスメント調査団」の 最終報告会に参加して

当協会長 八木健三

十和田八幡平国立公園の八甲田山岳にロープウェーを建設する青森県の計画に対し、反対運動を続けてきた市民団体「美しい八甲田山を子供たちに」県民の会」の「美しい八甲田山環境アセスメント調査団」の最終調査報告会が、一九八九年一月二六日青森市共済会館で開催され、私は調査団顧問として招待されたので、ここにその印象をのべたい。

実はこの調査団の中核として活動された弘前大学の宮城一男、牧田肇教授や八戸高校の松山力氏らは東北大学での私の教え子だったという縁で、調査団の顧問に推された。一九八七年一〇月には八甲田山の現地調査に参加し、その後中間報告会での講演や新聞への投書をするなど、この運動には深い関心をもってきたのである。

そもそもこの計画は国立公園の特別保護地区内の八甲田大岳山頂に大きなロープウェーを建設し、付近一帯をスキー場とし、完成十年後には年間百万人をこえるスキーヤー、登山者を招くという、全く無謀ともいえるべき開発計画である。しかも法的難点を見越し、許認可が得られやすいように事業は青森県を主体とし、地元資本の参加する第三セクター方式をとった。

八甲田山の自然を破壊するこの計画が発表されると、早速青森、弘前、八戸などの市民を中心とする市民団体「美しい八甲田山を子供たちに」県民の会（会長秋元良治、理事長「蒔苗政義氏」）が結成され、県側の行うアセス

に対抗して、弘前大学の研究者を中核とした「美しい八甲田山環境アセスメント調査団」を組織した。これにより環境科学、地学、生物学、水文学、経済学等、自然科学と社会科学の両面から、総合的な現地調査と予測が三年間にわたってつづけられた。その活動をさ

さえたのは、大岳の標高一、五八五呎にちなみ、一五八万五千円を目標とした市民のカンパ活動による基金であった。最終的に基金は百五十万円をこえたという。

この地道な調査によると、八甲田山一帯は現在の登山者、スキーヤーの入り込みによって、すでにオーバーユースの様相を呈し、とくに大岳や井戸岳、赤倉岳山頂の植生は枯死し、裸地は年々拡大しつつある。昆虫相は著しく変化し、全体として単純化、人里化が進行し、溪流の富栄養化の兆候が明らかとなった。また地域経済論的な検討により、この計画に見込まれるような地元への経済効果は期待し得ないことも明白にされた。

これらの中間報告をもとに、「県民の会」は県民に計画の白紙撤回を強く要望した。科学的調査に基づくアセス調査の結論に、さらに県側の行ったアセスにおいても、「自然に重大な影響を及ぼすので、この計画は適当でない」との結論が出されたため、県当局もついに一九八九年四月計画を断念する方針を打ち出さざるを得なくなったのである。

この経緯は、八月の知床シンポジウムの「リゾート開発と住民運動」分科会で蒔苗氏によ

り報告され、「県民の会」の努力が盛んな拍手をもって高く評価された。今回の最終報告会には、この市民運動の勝利を喜び合うとともに、従来の運動を総括し、今後の活動への新しい展望を切り開くことを目的としたものであった。

会場には予想をはるかに上まわる八〇名の出席者があり、急ぎ配布のプリントを増刷するほどであった。秋元会長の「会員の協力に感謝し、運動の成功を喜ぶ」との閉会の挨拶のあと、多数の学生を動員した八甲田山登山者数や経路の調査、県内小中学校の学校登山実態のアンケート調査、さらに過去二十数年間の航空写真による裸地化の進行状況などに基づく、牧田調査団長の総括的報告が行われた。科学的データに裏づけられたこの報告は、まことに説得力に富んでいたが、中でも一同を驚かせたのは、「八甲田大岳には児童・生徒だけで二万七千人が登山し、一校一度に千人以上のこともあり、この大量登山が踏み荒らしに結びついている」という所見であった。「自然に親しみ、自然を守る学校教育が結果的に自然の破壊につながっている」という複雑な問題提起であった。このオーバーユースの現状からも、ロープウェー建設は論外であることは明々白々となった。

このあと各論にうつり、松山力氏（地学）は崩落しやすい火山岩層と植生の関係をスライドで詳しく説明し、佐原雄二氏（動物学）はとくに水棲動物と溪流の富栄養化の関係を

のべ、神田健策氏（経済学）は現在すすめられているリゾート開発の問題点を指摘し、ロープウェー計画が経済効果をもたらさない見通しを明らかにした。

それに引きつづき、私は「特別報告」として、この「県民の会」と「アセス調査団」の活動が、県を計画断念に追い込んだことを祝するとともに、そのもつ大きな意義にふれた。さらに現在北海道においてリゾート開発により、貴重な自然が破壊の危機に瀕している実態をのべ、とくに一月二一・二三日に行われる夕張岳シンポジウムに対する協力を要請して報告を終えた。これに代えて、会員から四万五千円に上るカンパが寄せられたことは感謝に堪えなかつた。

最後に「これらの資料、結論を最終報告書として出版すること」を決め、この記念すべき勝利の最終報告会は終了した。この報告会を通じて、私は行政側のアセスに対する市民側のアセス調査のもつ意義、各地の市民団体が互いに連携しつつ共同の目的に進んでいくことの重要性和喜びとを実感することができた。その夜の祝賀会が、みちのくの銘酒を傾けながら、大いに盛り上がったことはいまでもあるまい。

（追記）県民の会の蒔苗理事長はその後夕張岳シンポジウムに参加、八甲田の経験をのべて拍手をあげ、分科会ではスライドで八甲田山オーバーユース状況を説明して参加者に感銘を手えられた。なおその後、八甲田アセス調査基金に多額の拠金をされた青森県古牧温泉社長杉本行雄氏は、夕張岳シンポジウムにも三万円の拠金を下さった。これらのご協力に対し心から感謝したい。

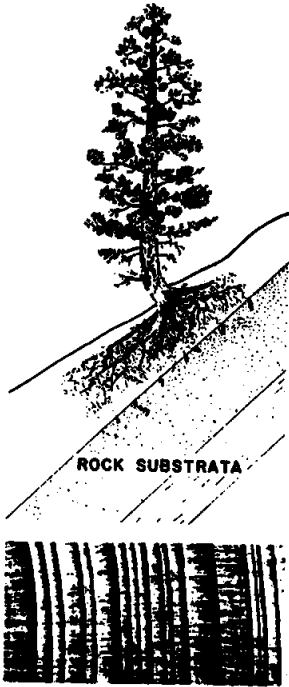
年輪

辻井達一 (北大農学部教授)

樹木に年輪のあることは誰もが知っているだろう。年輪は木の幹の横断面にみられる同心円状の層で、寒暖の差による形成層の発達の違いで粗密が生じることよってあらわれる。

年輪の幅は成長の遅い木では狭く、早い木では広くなる。同じ樹種でも成育の場所によっても差が生じるし、斜面では一種の応力が働いて、山側と谷側では幅に違いが生じる。平坦な場所でも光を受ける側と陰の側で差ができることもある。

数十年、数百年といった長い樹齢を経た木の年輪からは気候の変化が読み取られる。



SENSITIVE RING SERIES

年輪を調べるには幹を輪切りにした円盤を採るか、あるいは成長錐(せいちようすい)という一種の錐を使ってサンプリを採るかして測定する。こうして得られたデータからは、気候や立地など環境の変動が読み取られる。年輪の表れている円盤は樹木というコンピュータに内蔵され、その成長に関するさまざまな情報の記録されたディスクである。

年輪は古くから知られた存在であるが現在では単に木の年輪を知るだけでなく環境変動を追跡したり比較したりするデータとして用いられる。

(図は M.A. Stokes and T.L. Smiley: Tree-Ring dating, 1968 から)

陳情書 要望書 意見書

森林の保健機能の増進に関する特別措置法案の廃案を求める陳情書

- 一九八九年十月三十一日
- 衆議院議長 田村 元 殿
- 参議院議長 土屋義彦 殿
- 農林水産大臣 鹿野道彦 殿
- 北海道知事 横路孝弘 殿
- 北海道自然保護協会 会長 八木健三

第一四回国会に提出された森林の保健機能の増進に関する特別措置法案(以下法案という)は、その主たる目的が保安林等の規制緩和にあるため、法案が成立すれば、利益性の高い観光地域への民間デベロッパによる過剰な観光開発の導入と、自然破壊が予想され、社会的にはむしろ弊害をまねく恐れが大きく、また法案そのものの必要性も認められないので、廃案とされるよう陳情いたします。

記

- 一 森林の保健機能に関する計画制度の確立は現行法令で対処できること
- 二 保安林等の規制を大幅に緩和するものがあること

法案第三条から第五条にいたる「保健機能森林」には国土保全が十分に配慮されておらず、また法案第七条、第八条では、「森

林保健施設」の整備に際しては、森林法によって規制されている次の事項、

- (7) 民有林における一ha以上のゴルフ場等の開発行為許可(森林法第一〇条の二)
- (8) 保安林における立木伐採、土地の形質の変更等の制限(森林法第三四条)
- (9) 保安林における植栽義務(森林法第三四条の二)

を適用除外とするものである。

さらに「森林保健施設」の対象森林面積に対する比率や規模等は、省令で定めることとしているため、歯止めが弛む恐れもあり、また法案第九条では森林組合の事業の利用の特例として、員外利用の限度を超えて事業を行うことができるので、大規模開発が導入できることとなる。なお「特定認定森林所有者」が事業を行うとすると、違反行為を犯しても法案には認定取り消し規定もない。

しかし以上のような規制緩和は、総合保養地域整備法(リゾート法)の成立以来、日本中に無秩序なリゾートブームを起し、その弊害が多くの国民から激しい批判にさらされている現状において、リゾート法森林版ともいうべき法案が成立すれば、さらに観光開発熱をあおり、公益性の高い森林地域に民間デベロッパーを誘い、自然環境の破壊をもたらす恐れが大きい。

- 三 保安林解除に対する国民の意志が反映されなくなること
  - 法案第二条の「森林保健施設」の整備を保安林内で行う場合、現行法令では保安林解除を必要とする行為が多く含まれると予想されるが、法案が成立すれば保安林を解除せず、そのまま現状変更行為ができるとしている。現行の保安林解除に際しては、その内容に異議のあるときは意見書を提出できる制度があるが、法案が成立すれば、その道も閉ざされ、公益的森林に対する国民の意志が反映されなくなる。
  - 四 公益的機能を有する固有林の経営は一般会計で賄うべきこと
- (紙面の都合により一部省略しました)

# NO. 1



(会場記載のないものは  
事務所で実施・敬称略)

## 一九八九年度第六回常務理事会(拡大)

一九八九年九月二十七日

出席者 八木健三、徳浩三、鮫島惇一郎、  
中野徹三、紺谷友昭、福地郁子、柳沢信  
雄、熊木大仁、前田重和(九名)

## 議案

### 一、八月度決算報告

高橋事務局長より説明があり了承され  
た。

### 二、自然観察指導員講習会の件

七月に道内各市町村に配布した自然観  
察指導員養成講習会の文書を検討した結  
果、配布された内容で当協会が実施する  
ことは困難であり、従来通り日本自然保  
護協会との共催で行う。

尚、各市町村へは、このことを了承さ  
れるよう文書を作成する。

### 三、白旗山スキー距離コースの件

札幌市の計画内容を検討した結果、協  
会としては既に反対を表明しているの  
で、これ以上コメントすることは適当で  
ないという結論になった。

四、今後の講演会・観察会について

今年度二回実施予定の講演会の内容に  
つき検討したが、次回理事会で結論を出  
すこと。観察会は原案通り承認された。

### 五、夕張岳スキー場の件

スキー場計画案が提示されるのは十一  
月になる旨会長より説明があった。

### 六、その他

①森林特別措置法案を廃案にするため  
の土台づくりを行うことが了承された。

②自然保護関連の問題提起を電話など  
で受けることが多いが、以後、全て文書  
で受け付けることが了承された。

③千歳川放水路計画の今後の対応につ  
き会長より、実施反対の団体の代表者が  
開発の矛盾を出しながら、開発局と対  
応する旨報告があり、了承された。

④奥尻の自然を考える会への対応につ  
いて検討され、問題点を文書で提出して  
もらった後、早急に検討することが了承  
された。

## 講演会のご案内

○日時/一月十一日(木)

午後六時半〜八時半

場所/札幌市教育文化会館

(札幌市中央区北一条西十三丁)  
講師/藤原 信氏(宇都宮大学教授)

「リゾート開発の問題点」

☆林野行政・リゾート開発に対する警  
告というかたちで講演していただき  
ます。

○日時/二月六日(火)

午後六時半〜九時

場所/札幌市教育文化会館

(札幌市中央区北一条西十三丁)  
講師/神原昭子氏(日本消費者連盟)

「ゴルフ場問題について」

小野有五氏(北大環境科学研究  
科教授)

「ヒマラヤで環境を考える」

☆地球環境の急速な悪化とゴルフ場造  
成にともなう諸問題を含めお二人に  
お話ししていただきます。

## 寄付金

「北海道花の名店会」より、花のカレ  
ンダー作成記念として、自然保護に役立  
てるよう一〇万円の寄付をいただきまし  
た。

その他次の方々から寄付をいただきま  
した。ありがとうございます。

二井田高敏 二、〇〇〇円

深林 広行 三二、〇〇〇円

深林広行さんが「真珠宝石の深林」の

店内に「売上金は自然保護協会に寄付い  
たします」と註をつけ、八木会長の画を  
数点掲げていたところ、「先日さるご婦人  
が恵庭岳の二点を買ひ上げてくれました  
」と、協会に三万二千元寄付して下さい  
ました。ありがとうございます。「ヘ  
ー、会長の画にそんな大金を出す奇特  
な人がいるの...」

なおこの他に「夕張岳シンポジウム」  
に多くの会員の皆様から多額の協力を金  
をいただきましたこと厚く御礼申し上げま  
す。

## 事務局からお願い

本年度及びそれ以前の会費未納の方は  
至急お納め下さい。

個人A会員 四〇〇〇円

個人B会員 二〇〇〇円

(A会員と同一世帯の会員)

学生会員 二〇〇〇円

団体会員 一口 一〇〇〇〇円

(会費納入方法)

郵便振替口座 小樽一四〇五五

北海道拓殖銀行本店〇一七二五九(普通)

北海道銀行本店 一〇一四四四(普通)

なお、住所を変更された方はお手数で  
すが、その旨ご通知下さるようお願いい  
致します。

一九九〇年一月一日発行

〒札幌市中央区北三十四一 加藤ビル5 六階

発行所 北海道自然保護協会

電話 (〇二二) 二五一一五四六五

発行人 八 木 健 三

印刷 北海道機関紙印刷所